

くらしと協同をたずねて

沖縄県糸満市における伝統的な水産物行商販売の 存続とその可能性

～糸満公設市場と「あんまー市場」を事例に～

田中 佑佳 (沖縄県水産海洋技術センター)

はじめに

沖縄県糸満市には琉球王国時代から継承される固有の漁民文化がある。彼らは漁業者の総称とされ、海人「ウミンチュー」と呼ばれている。一方、海人が漁獲した魚を行商販売するのは婦女子の生業とされ、特に糸満出身の行商販売を行う婦女子は「アンマー」と呼ばれた。近年、都市化が著しく進む糸満市だが、未だ伝統的な水産物流通の名残を受ける魚市場が零細ながら経営を行っている。本稿では、聞き取り調査を基に、市場の歴史的発展を概観しながら、市場が直面している諸問題について論じている。

市勢概要

1) 位置

糸満市は沖縄本島の最南端、県都那覇市から 12km 南下した場所に位置している。美しい珊瑚礁と白浜の海岸線が摩文仁ヶ丘^{おかに}へ繋がり、東方に具志頭村^{ぐしかみぞん}、東北に東風平町^{こちんだちよう}、北方は豊見城村^{とみみぎ}、そして西方及び南方は東シナ海に面している。東西に 7.5km、南北に 10.3km 広がり、その総面積は 46.63km²、県内 12 番目の広さを有する行政区である (2011 年 10 月 1 日現在)。周囲は海洋に取り囲まれ、暖かい黒潮の影

響を受けているため、その気候の特徴は亜熱帯海洋性である。

2) 沿革

本市は、1908 年に 1 町 5 村^{いとまん} (糸満町、兼城村^{かねぐすく}、高嶺村^{たかみね}、真壁村^{まかべ}、喜屋武村^{きやん}、摩文仁村) で形成されたが、1945 年に今時大戦の終焉地となり戦禍に曝され全てが焦土と化した。翌年 4 月には 3 村が合併、さらに 1961 年には糸満町と他 2 村が合併し、新生糸満町となり、1971 年に県下 10 番目の市となった。1972 年 5 月 15 日は沖縄県の本土復帰が実現し、以来今日まで発展を遂げてきた。2011 年 12 月現在の人口は約 5 万 9 千人である。

沖縄県漁業の概要

「第 42 次沖縄農林水産統計年報」によると、2008 年の本県の漁業経営体数は 2801 経営体で、その内訳を見てみると、北部が 695 経営体、中部が 668 経営体、糸満市が属する南部は 799 経営体、宮古島が 327 経営体、八重山が 312 経営体となっている。

主な着業漁業種類は近海カツオ一本釣り、沿岸マグロ延縄、ハマダイ・ハタ類等を漁獲対象とした釣り、ブダイ・アジ類を漁獲対象とした刺網漁業、また、リーフ内外の浅海岸を魚場とする潜水器漁業・追込

表1 沖縄県の主要漁業種類と漁獲される魚種の分類

漁法	漁獲される魚種
追込み網漁業	タカサゴ、ブダイ、イカ類、スズメダイ
建干網漁業	アイゴ、ヒメジ、アジ、ブダイ、タイ類
いかつり漁業	トビイカ、マグロ、カジキ、サメ
底延網漁業	ハタ類、マチ類、タイ類、ハマフエフキダイ
刺網漁業	ヒメジ、アジ、アイゴ、ブダイ、タチウオ
潜水器・採貝藻・エビ取り漁業	サザエ、シャコ貝、イセエビ、タコ、コウイカ
一本釣り	マチ類、ハタ類、アジ類、タイ類
トビウオ浮敷網漁業	トビウオ、ダツ
曳網漁業	マグロ、カジキ、カツオ、シイラ、サワラ
マグロ延縄漁業	マグロ、カジキ、サメ、シイラ、サワラ
立延縄漁業	アオダイ、オオヒメ、ヒメダイ、ハマダイ、アジ類

出典：沖縄県糸満市資料より筆者作成

み網・建干網等の伝統的な糸満漁業の系譜をひく、「その他」に分類される漁業である。最近では浮魚礁（バヤオ）の設置により、曳縄漁業によるマグロ・カジキ・サワラ等の回遊魚の漁獲量も台頭している。

このうち、マグロ・カツオ漁業は漁獲量で海面漁業全体の3分の2、水揚金額の約5割を占めており、県漁業を支える最も重要な柱となっている。表1は沖縄県の主幹漁業種類とその漁法によって漁獲される主要な魚種についてまとめたものである。

また、本市は糸満ハーレー、糸満大綱引きの二大祭りの開催地として県下でも有名である。糸満ハーレーは、太古から漁業の町として栄えたことから航海安全と豊漁を祈願する行事である。各地区から選出された漁民（ウミンチュ）が色鮮やかなハーレー舟（爬竜船（ひりゅうせん））と呼ばれる龍の頭と尾で装飾された幅が狭く長い

船）で競漕する郷土色豊かな祭りで、毎年旧暦の5月4日に開催される。

旧暦の8月15日に開催される糸満大綱引は、「万人の綱」「豊年を祈る」神事性を重んじた古式ゆかしい祭りである。

糸満市漁業の歴史

前述したように、糸満市は県全域の中で漁業経営体数が最も多い地域である。沖縄本島において糸満漁民は漁業者の総称とされ、「糸満ウミンチュ」「イチュマン」（糸満漁民）と呼ばれている。それは、糸満漁民の漁法が長年に渡り、卓越した漁労技術を基盤にして本県の漁業を代表しうるほど高い地位を占めていたからである¹⁾。

とりわけ、網漁業の出現に伴い、糸満漁民が群を抜いて頭角を現してきたと考えられている。本県の網は「サデ網」と呼ばれる他府県に例を見ない大型の異様な形状をした追込み網だが、珊瑚礁が多く狭隘な礁間の魚を漁獲するには最適な漁具とされている。その後、サデ網は竹棒を使用する小型追込み網漁「ササ網」へと発展する。

糸満地区では古くから「サバニ」と呼ばれる無動力の小舟を用い、ササ網を使用した「サガーマ」と呼ばれる狩込網漁を営んできた。

古来の狩込網漁を原型としながら糸満漁民の漁法は進化を遂げていくことになるが、その代表とも言える漁法が「パンタカー」である。主に、サバニ5隻と漁民15名から20名で操業し、袋網をリーフ内の浅場に潮流を受けるように設置し、両側の袖網を海底の浅場と深場に張る。漁民はいずれも海中に飛び込み、両手で水面を叩きながら魚を追込んで行く方法である。主にアオリイカやコウイカ等の小型水産物が

漁獲される。

さらに 1884 年に「ミーカガン」と呼ばれる水中眼鏡が糸満漁民によって発明されると、大規模な漁民とサバニを集結させて構成する廻高網漁業（まわしたかあみ）へと発展する。この漁法は、「パンタタカー」同様、魚を追う「アゲル」ことから「アギヤー」と呼ばれ、戦前、糸満漁民はこの漁法を用い、南西諸島はもちろんフィリピン・シンガポール・ジャワ・スマトラ・スマトラ島海域へ出漁していた²⁾。

糸満市における 水産物流通の歴史

では、漁業生産の発展に伴い、県内の水産物流通がどのように変化にしたのかについて見てみよう。ここでは、県内における鮮魚の大消費地となっていた那覇と、その供給の主力を担っていた糸満漁民との関わりについて注目する。

市川（2009）は、「昭和初期の那覇における鮮魚の流通経路は大まかに 3 つに区分できる」と述べている。第一は、那覇市内 6 ヶ所の公設市場への搬入・販売ルート、第二は糸満漁民の婦女子による行商販売ルート、第三は卸売市場へ出荷し、入札・販売するルートである。

大正末期になると、マグロ延縄漁業・瀬魚一本釣り漁業が台頭し、漁業の近代化路線に乗って鮮魚の大量流通・大量供給が急伸する。

しかしながら、那覇への鮮魚流通の基本は、既述した第一と第二のルートであった。そして、これら供給者の大部分が糸満漁民と糸満周辺の分村で、婦女子の手を経て那覇市の公設市場へと搬入・販売されたのである。

そこで、本稿では、糸満漁民が漁獲した水産物を行商販売する婦女子に焦点を当て歴史を紹介するとともに、その流通形態の現状についてみていく。

糸満の婦女子たちの経済活動

1) 販売システムと糸満公設市場

糸満漁業の大きな特徴の一つに、「男は漁業、女は魚商」という家族内性別分業と、「ワタクサー」（私の銭という意味）という女子だけの私財を貯蓄し所有する習慣がある。男性（父親・夫・兄弟）が漁獲した水産物の売値を売り手、つまり婦女子が決め、販売終了後に総売上から販売マージンを差し引き、卸値にあたる元金を男性に納めるシステムである。

自身の技量で得た利益は私財として別に貯金できる「ワタクサー」制度は、公然として認められた独自の経済システムであった。本土の多くの漁村でも、家族内における性別分業は多く見受けられるが、その場合は漁労と販売は常に呼応しており、経営と家計は一致している。

こうした経済システムが自然発生した背景には、「板子一枚下は地獄」の危険が伴う漁民へ嫁いだ女性は、「家族一同が路頭に迷わないためにも経済的に自ら自立していかなければならない、そのために「ワタクサー」は自衛の策であり、生命保険に匹敵する」という指南を、大半の女性が幼少期から受けていることに由来している。

2) 糸満から那覇までの流通ルートの変化

かつて、糸満の婦女子の仕事は「カミアチネー」とよばれる魚行商がすべてであった。大量漁獲を可能にした「アギヤー」漁法が完成した明治中期から戦前までは、運

搬技術も鮮度維持は殆ど整備されておらず、婦女子たちは50キロ前後の水産物を「ワタバーキ」と呼ばれる籠に詰め、頭に載せ那覇への15キロに及ぶ道のりを素足で運搬した。

そのような中、1907年に糸満街道が改修、1911年に客馬車、1918年に軌道馬車、1924年には軽便鉄道が開通すると那覇への交通条件は飛躍的に向上し、行商回数や販売量は著しく増加した。

また、動力運搬船を用いて追込み網漁業を操業する漁民の出現によって、糸満やその周辺地域からの託送が増加すると、那覇で荷受する糸満の婦女子の簡易宿泊施設「ヤールグワー」も増加した。

昭和初期には那覇市公設市場の周辺一帯に糸満集落が形成され、糸満漁業の那覇進出の前線基地として機能していた。

戦後、那覇市公設市場は戦禍により灰塵となり、社会経済の混乱は治まらぬまま1947年頃から露店で再開し、翌年以降、漸次整備が進められ、1969年には市内9市場すべてが開設した。また、地区漁協が有する市場が相次いで開設され、戦前に比べると格段に卸売機能が強化・整備された。

公設市場の整備が進む一方、行商販売は衰退傾向になり、本土復帰後殆どその姿を消すことになる。

3) 糸満公設市場

糸満市には「マチグワー」と呼ばれる公設市場がある。「マチグワー」とは、「小規模なものを意味する方言で、「モノ」「場所」以外に私的なもの、内輪的なものに至る広範囲な領域に用いられる南島特有の用語法である³⁾。

「マチグワー」は、もともと通りに商品を並べる路上商いとして発生した。主に、近隣の農家が野菜を路上販売し、帰りに魚

や加工品を購入するといった物資交換の場であった。

人びとの語らいと交流の上に成り立ち、次第に店舗化したものが「マチグワー」であり、そこには「ハマ売り」と呼ばれる個人売りの婦女子たちの伝統的な商いぶりが生きている。「ハマ売り」は市場でのセリを通さず網元から直売する販売形態で、「ハマ売り」をする糸満の婦女子は「アンマー」（以下、アンマー）の愛称で親しまれてきた。

「ハマ売り」が定着した主な理由として、①小規模経営体の漁業者は潮汐に合わせて出漁するため朝7時のセリに間に合わない、②冷凍・冷蔵施設を整備するだけの経済力がない小規模経営体が大半を占めている、ということが聞き取り調査から明らかになった。

そもそも、「アンマー」とは「母親」を意味する方言だが、「商売だけでなく家事や育児もこなしてこそ自立した女性」という意味がこの「アンマー」には込められている。

現在の糸満公設市場は1965年、地区東部や西部に点在する水産物・豆腐・芋等の市場を埋立地内に統合して移転建設されたものである。面積は1423㎡で、場内は「イユマチ」と呼ばれる魚市場、「ヤセエマチ」と呼ばれる青果市場から構成され、開設当時は43店舗が出店していた。また、場内の一角には周辺農家が出荷する少量多品種の青果物を販売する「バラ市」「雑市」が併設されている。市場周辺部の裏路地には飲食店や日配品の個人店舗が密集している。

場内における鮮魚販売は、冷蔵・冷凍設備を有する常設店5軒と、市場周辺の路上で経済活動をするアンマーに二分され、零細規模な網元出身のアンマーが圧倒的多数を占め、ソデイカ・小魚・冷凍品を路上

販売していた。午後 2 時から夕方まで数時間販売するグループ、朝 7 時のセリ終了後から正午前まで数時間販売するグループ、終日販売するグループと路上販売は 3 つの時間帯に分類されることがわかった。

いずれのグループも鮮度を維持する手段としては氷や水を自身で準備する程度である。こうした冷凍施設を所有しない水産物販売は衛生法の条例違反、あるいは公道や下水道近辺での水産物販売は道路法違反にあたるとして、多々、行政指導や警告を受けていた。だが、一家の家計を背負うアンマーにとって、行政指導を受け形勢が不利になったところで商売を諦めるわけではない。行商を通して培った巧みな話術を生かし商売を継続しているのもまた事実である。

また、経費を支払い冷蔵・冷凍施設を整備している常設店からしてみれば、路上販売と常設店では鮮度に大差はなく、さらに常設店よりも格安なため、客を取られる一方で全く理にかなっていない。こうしたことから、路上販売側と常設店側との客の争奪戦や売場を巡っての口論は「マチグラー」では日常茶飯事であった。

このように、「マチグラー」は、「モノ」「カネ」といった経済活動の場だけでなく、人びとの生活が繰り広げられている場所であり、糸満が育んだ共同社会の集大成の場であったと言っても過言ではない。

4) アンマーの経済活動の特徴

糸満漁港に水揚げされる主要魚種は、シビマグロ・メカジキ・カツオ類・フエフィダイ・マチ類・ハタ類・サワラ・シイラ等、多種に渡っている。午前 3 時から出漁し、午後 2 時前後に帰港するのが糸満漁民の一般的な操業パターンである。従って、本格的に「マチグラー」が活気づくのは午後 2 時から夕方にかけてである。夏期の閉店は

9 時、冬期は 7 時である。

市場周辺や路上で商いを行うアンマー、得意先の料亭や寿司屋等に直売するアンマー、周辺の家庭を一軒一軒訪問しながら直売するアンマー、那覇の公設市場のみ直売するアンマー等、その販路は様々である。

特に、帰港直後のカツオやシビマグロは鮮度が抜群で、糸満公設市場の開場と共に、地元住民だけでなく料理人、中部や北部からも顧客が来場し鮮魚を買い求めた。

そうしたことから、翌朝のセリ前に商品が完売する場合や、市場価格の倍の値段で直接取引されることが多く、那覇市公設市場では多くの仲買人が糸満産の水産物をこぞって競り落とした。

また、糸満のアンマーは網元出身の婦女子であることから、網元である男性（父・配偶者・兄弟）から魚を直接仕入れ、その日の海況や漁獲状況に合わせて自身が価格を決定できる強みを持っている。つまり、価格決定の目利きができれば、「ワタクサー」もその影響を受けることになる。

加藤（2012）は、「糸満アンマーにとって、自らの力で働き報酬を得る魚売りは、漁獲と販売によって成り立つ共存社会の平等で、当たり前人間営為であり、伝承されてきた「ワタクサー」という経済生活を基盤にしたこの習慣を誇りにしている⁴⁾」と指摘している。

一方、那覇や他地区の婦女子は糸満のように全員が網元出身の婦女子とは限らないため、市場で魚を競り落とした後、得意先に販売する仲買人に近い業務を行っている。糸満に限らず沖縄各地の市場では女性仲買人が圧倒的に多く、当時は全体の約 8 割を占めていたことが聞き取りからわかった。

こうしたことから、糸満アンマーが卸売市場や那覇市公設市場に対して多大な影響を及ぼしていたかが垣間見よう。

あんまー市場

戦後を境に糸満は沖縄県の水産業の発展と都市開発の拠点となり、糸満を中心に周辺地区の合併が進んだ。1971年に市制が敷かれて以降、人口増加の一途を辿り、那覇市内や空港に近い利便性も相まって都市計画が着々と進められている。伝統的な「マチグラー」を取り巻く環境が変化していることは言うまでもない。

現在、糸満公設市場内に残っている鮮魚店は2店舗のみである。従来と比較するとその出荷量は激減しているが、鮮魚の他、場内には地元農家が野菜や果物を直売するスペース、かまぼこ店、精肉店、そば屋、食堂が細々と商売をしている。

「あんまー魚市場」は糸満公設市場に隣接した魚市場で、1994年に7名のアンマーの共同出資によって設立された。前身は市場周辺で鮮魚の路上販売を行っていた行商である。

衛生法や道路交通法がさらに強化され、昔ながらの路上商いが困難になったことを機に、事務所だった空き家を借り上げ、店内を改装し、冷蔵設備が整備された常設店舗の開業に踏み切った。設立にあたり糸満市や沖縄県からの助成金は一切なく、一人あたりの出資金は約200万円であった。

店内には5軒の鮮魚店と、6名のアンマーたちが自由に販売できるスペースを店内一角に設けている。鮮魚店の経営を担っているのは、網元の後継者やアンマーの娘夫婦である。

客が買っても買わなくても黙って通り過ぎることはなく、世間話や魚の目利きについて「ゆんたく」し(会話に花が咲くこと)、地元住民の憩い場として重宝されている。

しかし、ここ数年、アンマーの高齢化が進み、一方では後継者不足や度重なる行政

からの警告を理由に商売を諦めるアンマーが目立ち始め、「マチグラー」から徐々にアンマーの姿が消え、糸満市公設市場と同様、「あんまー市場」も衰退の一途を辿っている。

図1は現在の糸満公設市場と「あんまー

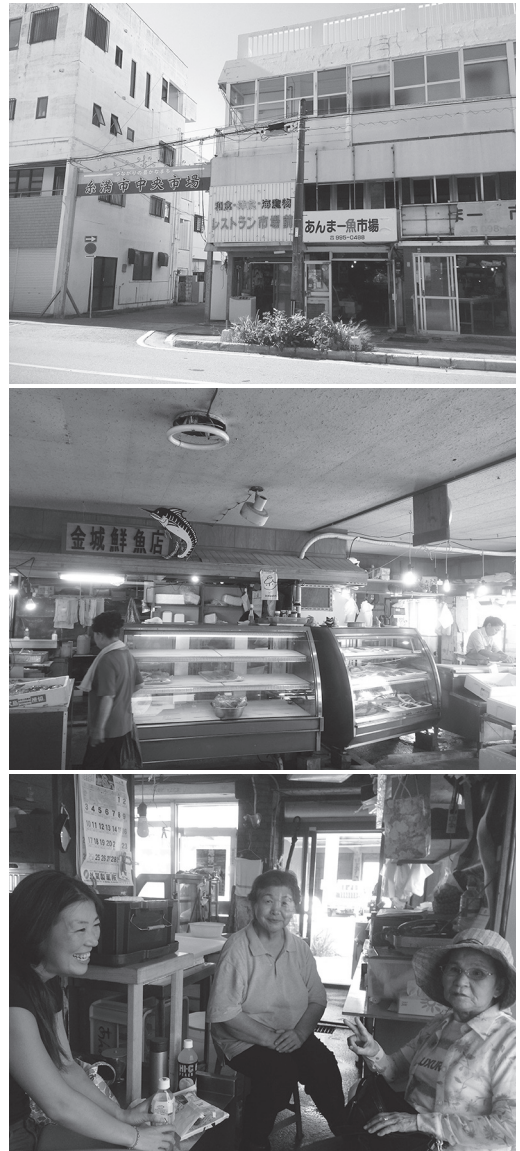


図1上：糸満公設市場、あんまー市場正面。

図1中央：あんまー市場店内。

図1下：大城さん(中央)と「ゆんたく」する地元の方。大城さんの母は85歳まで現役でハマ売りをする筋金入りのアンマーだった。筆者撮影

市場」を撮影したものである。

「あんまー市場」の現状

1) 「あんまー市場」が経営不振に陥った背景

では、なぜ糸満公設市場と「あんまー市場」が経営不振に陥ったのか。その理由として、①糸満市役所の新庁舎移転、②通称「糸満道路」と呼ばれる国道 331 号線のバイパスの開通、が聞き取り調査から明らかになった。その理由について見てみよう。

①糸満市役所の新庁舎移転によって、「あんまー市場」や糸満公設市場にとって最大の顧客であった地元の高齢者がバスや乗り合いタクシーを利用するようになった。住宅街から新庁舎までのルート上にバス停がなく市場前は通過する。高齢者は用事を済ませるとそのまま直帰することから市場に立ち寄る機会が激減したのである。旧庁舎は徒歩圏内に位置しており、役場での用事が済むと、市場に立ち寄って「ゆんたく」し、お目当ての魚や野菜、かまぼこを購入して帰宅するのが地域の高齢者の日常であり、楽しみでもあった。しかし、移転と共にその機会は喪失した。

②「糸満道路」は糸満市西崎と新庁舎が位置する糸満市真栄里間を結ぶ総延長 3.4 キロのバイパスである。このバイパスは新庁舎移転と時期を同じくして開通した。「あんまー市場」はこのバイパスよりさらに南下したところに位置するため、観光客や地元買い物客は「あんまー市場」の存在さえ知らない場合も少なくない。

また、2006 年には新庁舎からほど近い場所に大型量販店が開店した。広大な敷地面積を有し大規模駐車場を完備、敷地内に家電量販店、レストラン、本屋など多くの

テナントが集合する複合施設は、完全な車社会である沖縄県民のニーズを満たしている。さらに、長い営業時間や冷房完備、バイパスの利便性も相まって地元住民は一気に大型量販店へと流れ込んだ。

2) 糸満公設市場と「あんまー市場」を取りまく地域環境の変化

2002 年、糸満市西崎地区は糸満市役所新庁舎の移転や糸満道路の開通だけでなく、JA 沖縄のファーマーズマーケット「うまんちゅ市場」(以下、「うまんちゅ市場」)や沖縄県漁業協同組合が運営する「お魚センター」、糸満市物産センター「遊食来(ゆくら)」が相次いで開業した年でもあった。

ここで、「うまんちゅ市場」について少し触れておこう。「うまんちゅ市場」は糸満市の 5 農協が 1992 年合併し、糸満市農業協同組合が誕生し、その合併 10 周年の記念事業として、2002 年に組合員の所得向上、規格外農産物の販売先等、組合員への還元策を目的に設立された。開設当時の出荷者数は 349 名だったが、2013 年度は 1214 名にまで達している。表 2 は「うまんちゅ市場」の概要である。

また、「うまんちゅ市場」の後方には「お魚センター」、「遊食来」が隣接している。同地区には 1995 年に同名の「お魚センター」が設立されたが、施設の老朽化や

表 2 JA 沖縄ファーマーズマーケット
「うまんちゅ市場」概要

設立年	2002年
運営母体	JA 沖縄
出荷者数	1214名
営業時間	9:00~19:00
売場面積	285坪
従業員数	正社員 2 名、パート 50 名
売上金額	15億円
手数料	農産物 15% 加工品 20%

聞き取り調査により作成

取扱う魚種も少ないことから、2008年に旧施設に変わる新施設として開設された。鉄筋コンクリートの1階建てで総床面積は1200㎡、総事業費は約2億円である。施設内には地元魚屋が9軒、1軒の漁協自営の直売店が出店している。その翌年「遊食来」が開設された。

このように、2002年の糸満市新庁舎移転を皮切りに、糸満公設市場や「あんまー市場」を巡る環境は大きく変化した。図2は大型量販店、図3は「うまんちゅ市場」、「お魚センター」、「遊食来」、について撮影したものである。



図2上：市役所からほど近い立地にある大型量販店。
図2下：大型量販店の鮮魚コーナーの一角では地魚が販売されている。 筆者撮影



図3上：「うまんちゅ市場」店内。
図3中央：「お魚センター」店内。
図3下：糸満物産センター「遊食来」外観。

筆者撮影

まとめ

「あんまー市場」に現在出店している鮮魚店は4店舗である。1店舗は網元の息子夫婦が運営しているが、残り3店舗はかつて、一本釣りや「アギヤー」・「アンブシ」と呼ばれる建干網漁業を営む網元が漁獲したカツオやマグロ、少量多品種の小魚や貝類等、多岐に渡る水産物を「ハマ売り」していたアンマーたちが切り盛りしている。

既に網元は高齢となり漁業を引退しているため、長年の付き合いがある地元仲買人から魚を購入している。主な買い物客は地元の顧客や居酒屋店主が大部分を占めているが、その経営状態は極めて厳しい。一日の準利益が3000円を下回らないためにも魚が完売するまで営業している。営業時間は朝8時から夕方6時、店舗によっては夜9時である。

経営難に陥った理由は上記した地域環境の変化だけではない。高齢化が進む同地区周辺は近年、デイケアサービスが増加し、高齢者を自宅から施設まで送迎するマイクロバスによって高齢者の外出が著しく減少した。

「家族行事の度に年寄り」は「マチグワー」に来て、特に孫に魚や肉、野菜を振る舞うため、たくさん買い物をした」と「あんまー市場」で30年間鮮魚店を営む女性店主の大城さんは「マチグワー」には年寄りが必要であると強調している。さらに、大城さんは高齢化社会にとって本来必要不可欠である「便利さ」を問題視している。特に、デイサービスの送迎によって年寄りの外出機会が激減し、結果、「マチグワー」に年寄りが来なくなったことが市場衰退の最大の原因と推測している。

「うまんちゅ市場」の開業にあたり、J

A沖縄は「あんまー市場」をファーマーズマーケット店内へ誘致することを提案したが、「あんまー市場」側はそれを辞退した。

なぜなら、買い物客は鮮魚の購入目的で市場を訪問する場合が多く、その勢いで野菜やかまぼこ等、魚以外の商品を購入する。つまり、鮮魚店が撤退すれば、必然的に場内の各種店舗も経営危機に陥るからである。異業種でありながらも、「マチグワー」に共存する者として長年培ってきた人びとの連携がそこには残っている。

糸満漁民はその優れた潜水技術と独自の漁法によって、国内のみならずアジア諸国にその名を轟かせた。そして、漁獲した魚を行商し、家計を賄うアンマーとの二人三脚によって糸満漁業は今日まで発展してきた。

都市化や流通整備の発展と共に、婦女子たちの人力による流通形態は消滅したが、「あんまー市場」はその名残を継承する唯一の場所である。歴史的価値だけでなく、市場を介して育まれてきた人間関係、地域住民との関わりが今もなお根付いている。

零細経営の市場を存続するためには、もはや市場関係者の努力や熱意だけでは対応できない状況に陥っているのは明瞭である。

こうしたことから、今後、県や市の職員による市場視察を積極的に行い、かつての盛況とまではいかなくとも、せめて地域住民の関心を向けるような打開策を市場関係者と行政とが一丸となって見出すことが今、「マチグワー」の存続にとって最も重要なことではないだろうか。

引用文献

- 1) 市川英雄『糸満漁業の展開構造 沖縄・奄美を中心として』沖縄タイムス社、2009年、pp12。
- 2) 加藤久子『海の狩人沖縄漁民 糸満ウミンチュの歴史と生活誌』現代書館、2012年、pp14-17。
- 3) 加藤久子、前掲書、pp7～9。
- 4) 加藤久子、前掲書、pp36。